

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	日本人は果志て漢詩の趣味を解するや：雑録
Author(s)	工藤，忠輔
Citation	龍南會雜誌， 1 0 7： 6 1 - 6 6
Issue date	1904-10-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5728
Right	

日本人は果して漢詩に趣味を解するや

工 藤 忠 輔

一昨々年の夏北清事變の謝罪の爲來朝した清國公使那桐君と同舟して長崎より東上した事があつた同氏の隨行員の多數は清國各地の學堂より東京に派遣せる留學生で皆各學堂泰西學科の敎習及び他日敎習たるべき青年で小生の服裝を見て東京の書生たることを知り留學の目的地で殊に清國の敎育界には因縁淺からざる杉浦先生の門下生であることを知り小生を取圍むで或は手帳と墨壺を出し或は支那人にしては稍「てにをは」の正確な日本語で種々雜多の話しを仕懸け小生の西遊記水滸傳より得た怪しい時文と向側の文字の暢びやかを漢文の筆談電話的日本語の會話かはじまつた玄海瀬戸の景色の話しより科學の可否論時事外交より地理風俗より談は瀬戸の嶋々の變る様小生一人では中々應對に暇のない位段々進むて日本に於ける漢文學のことに移つた小生は二千年前に王仁博士の來朝より徳川時代と經今日に至る極めて粗略な文學史を書いて見せ其產物たる文章詩歌文章は記憶しなから有名なる詩の暗記し居るは皆書いて見せた日本の文物と徹頭徹尾賞讃して居た清國の留學生か我等の敬愛せる徳川時代の漢文學家の詩に就て如何なる評を下し如何なる意見と叙述したかと思召す乎

海風にゆらぐ舷頭の下に銀波金波をさゝめかす瀬戸内海の月を眺めながら余の書き付けた日本名家頼山陽廣瀨淡窓より今人の森槐南あたりの詩とすかし見ながら幾度か吟誦し遂に是等は詩として誦するに堪わぬ其の言ふ所は壯烈でも其の調は哀韻を帯ひて居たり或は其反對であり其心と調の一致

せざるのみならず甚しきは調をなさぬものがあり、結局二十字或は二十八字を排列した小品文の化者で其外形は詩でも其内容は詩といふ事は難いといひ終に予の書き示した淡窓翁の桂林家雜詠の中にある名高い休道他郷多辛苦多の詩を菊池溪琴が川流の二字を寒泉に改めたらどうと云ふたに大槻盤溪が淡窓先生は雪といふ字と寒の字を重複させるのを嫌うたのだらうと論じた事がある諸君はどう考へるかと聞いたたら原詩の意味は了々と腑に落ちるが矢張其の調との調和を取れて居ぬ川流と云はうと寒泉といはうと矢張同じ事で詩と成さぬ溪琴も盤溪も杓子定規の議論をして居ると言つた小生か貴清國今日の病根は諸君か以て黄金時代として居る彼堯舜時代に初まつて文王武王周公及び孔子孟子の徒によりて完成せられて居る文弱に起因して居る禮義三千威儀八百とは何のコッだ三年の喪貴賤に通ずとは箸にも棒にもかゝらぬ馬鹿な言ひ事と痛罵した犬養的の復仇かと思つたが日本人は果して漢詩を作り得るか何の爲めに漢詩を作るか其異趣を了解し得るかとの疑問は風雨を齎らず一片の黒雲の水平線上に踏まる如く此時より小生の胸中に蟠つて新聞雜誌の漢詩其他書生の吠ゆるか如き詩吟の聲を耳にする毎に此疑問の解決を試みて居たが彼清國の大學總長吳如倫の東遊の際東都の詩壇の重なる人々は相集りて歓迎の席上の談話は凡て筆談にして其の詩は唱和に非ず書[。]和なりしと聞き愈其疑問の決答は皆否とこたへらるべきを知りしかハマー[。]トンの論を見て太古の遠きより其の關係至つて深く英國は嘗て佛語を公用語とし今當上流社會はそを用ふるといふ如き間柄なるに詩に至ては斯く相犯し難きを知りハマー[。]トンの論に倣ひて日本人か果して漢詩の眞趣を解するやを江湖の諸君に問ふのである

日本に數年乃至數十年在留して熱心に日本語を研究する西洋人ブラック、ジョンペール、オーストレーキの日本語が尙眞の日本語に非ず何處かに發音其他に癒し難き欠点あるを知り其他彼等の吟誦する俗謠および多年日本に在る宣教師等の讚美歌が如何に吾人を噴飯せしむるかを思ふ毎に如何に外國語の發音の困難なるかを知るのである殊に日本語の如くアクセントなく音の種類の僅少なる語を使用せる人が外國語就中支那語の如き發音の種類多く綴毎に多様のアクセントを有する外國語を美事に發音し得るか況んや詩を作り詩を吟する迄に熟達し得るか甚心細い次第である其の上日本人が漢字漢音と使用してゐるのは何時頃のものであるか漢詩を列ねる先生達が暗誦してゐるのは正眞まいなしの品物であるか今日の某先生の英語の如くあらゆる發音と意味の誤謬を具して居る奴を千有年前の高襟ハイカラ隋唐の留學生が故國の人に傳へたものではあるまいか海漢汗等の發音は根本的に誤であり柏櫻嵐等の文字は意味が異なつて居るのは誰も知つて居る事である又日本の音では一東の中で宮空工供（これは二冬）に差別があるか支那現時の發音は皆同一である就れも皆Kungであるまた工虹紅は日本で同一で支那では皆殊なりKung Hung Kangである斯く發音は誤りアクセントは要領を得ない外國の言語で詩を作るは愚か詩を吟するなどは思ひも寄らない此の學校でも花陵會あたりの高襟連か日本語の讚美歌を奇怪極まる音と調子を以て西洋人のそれに眞似るを聞き氣色を悪くし其上西詩を氣車の中で吟じて居る輩を蛆の様に思ふ我等は漢詩を作る人々も同様の感を起さずに居れぬ何様な節で吟じ如何にして其の趣を解するのか（朗詠集以來の漢詩の吟じ方即今の書生や琵琶法師の吟じ方は漢詩とは何の關係も無い事は分明である）既に發音さへ不明であればハマー・トン

と支那留學生か小生に云ふた音と思想の一致などは決して分る筈はない況んや「暗示と言語の精鍊によりて常に詩中に現はれる小兒以來の連想」など分る事は萬々ない事は明らかである

次に日本と支那とに趣味に於て大に異なる所がある支那料理を食つた人は直に分る事なのだ詩に於ても同じこと古來日本では杜鵑をうれしがる事が甚しい一聲の杜鵑を聞かむ爲連夜ねむきをこらへる事があるのは珍らしくない然るに支那人は其の聲を聞いて無性に哀れがり悲しがる如何に漢詩を作る人でも母上が支那人と私通しない限りは杜鵑を嬉しかる筈である三十一文字に嬉しく二十八字に悲しいなどは非論理も亦甚しい但し半可通の讀者は俗謡中には杜鵑を悲しかるのが多いと頷をなで云ふか知れぬがこれは徳川時代の不平學者が其世に用ひられざる鬱憤をはらすに盛に狹斜に出入して漢詩を長短の俗謡に譯したから今尙其遺風か存じて居るので風來山人の所謂「三味線に唐音を乗せ」るものは是である、決して日本の藝妓女郎のみか趣味を異にする故では無いのだ

口數の多い漢字臚列家はまた吾人は支那の名作の平仄にあてはめて詩を作る故詩のしらべは決して誤は無いなぞ云ふか知れぬがこれは畢竟語呂合せの問題である團々珍聞や萬朝報を見給へ幾多入選の語呂合せは大概其音丈は見事に合つて居るしかも其優劣は何によりて判するか東京の語呂は東京の人に分り西京の語呂は西京の人にのみ分る即ちハマーソンの小兒以來の聯想と外國人には容易に讀過し難い餘計な文句のある爲めではあるまいかこれは又地方地方によりて異なる俚諺によりても一對句をなしたる俚諺の一句は等しく他の句は異なるによりても一地方地方に外來人の知り難い語呂の調子があるに相違ない況んや人種こそ同じけれ言語風俗習慣を異にして居る支那と日本に於

てをやである

英國人にして佛詩を一見し其巧拙を評し得るはウヰクトリア朝四大詩人隨一の學者たるスウキンバーンを措いて他に求むべからすとせば碌々支那語の發音だになし得ない我國人にして漢詩を評し得るもの存在し得べきやこれ問題なりと云はざるを得ない

演劇或は俗語等の新作の世に出る前には作者と振付師とは一致協力非常の苦心で推敲を重ねる、謠はせる弾かせる是を締聴して心に足らぬ處は改竄してまた試みると云ふ風にして初めて公にするこれ教坊の彈初めなどに往々傑作を出す所以である我習學寮の寮歌が龍南才子諸君の手に成り諧も亦音樂學校の作なるにも關せず何時も不評判に終るのは作者と作曲者の間に互に疏通しない所かあつて此等の用意が足らぬ故である而して謠る方法さへ御存知ない漢字臚列家諸彦は何により自作を添削推敲し他のを品騰する事が出来るのか

しかし漢學の我國に傳はりてより既に千餘年來我國の文學中の大勢力を有して居たのは漢詩である詩歌音樂と風流の第二にして居る現今に於ても新聞といふ新聞雜誌といふ雜誌には和歌はのせきとも必ず漢詩は出すといふ有様である何かの理由がなくはならぬといふかそれは知れた事

我日本には言靈の幸はふ國など已惚れ千萬な事をいつてるが實際は我等日本人の思想を現はす詩なるものは存じて居らぬ即我等は恥かしながら國詩なるものを持たぬ開闢以來和歌はあれども實際は死滅同様中古以來その吟じ方は忘却せられ漢詩と同じく文字の詩となり何時のやら分らぬ古い言語を用ひ其詩形の狹小と不活潑にして複雑なる社會の事柄は勿論花鳥風月とか惚れた體れたの蝶々の

外の描寫は甚だ困難で武士とか學者とかは其勇壯高遠の思想を現はすに散々苦勞の揚句遂に豊富なる漢字を借り來りて是に充て朗詠樂以來の吟し方に從つて是を歌ひ獨りよがり・に喜んで居たのだそれで有名の詩に平灰の錯誤多く支那人の目より見れば萬朝報の百文字的の小なる制限中に踞踏してゐる散文であるのは勿論であるそれを指して漢詩と稱するのは馬を指して鹿といふ格ではあるまいかこれは日本の詩である否日本の一種の散文と言ふ方遙かに妥當であると思ふ即他國の詩形に已れぬ思想を詰め込める其内容と外形とは何の關係もない他人の禪で角力を取るもの鼻持ならぬ話ではないか

如何に最負の風袋を加へても日本の漢字臚列家諸君に漢詩の眞趣が分る様には思はれぬ

我龍南會の諸君にも亦此漢字臚列に浮身をやつしやつした連中が多い希はくば小生の愚を憫れみ諸君の所謂漢詩は決して他人の禪的に非ず其眞趣の存する所は茲ぞよと御指教下さらば何のよろこびかこれに如かん

